

国際卓越大学院教育プログラムの開設に係る申請様式

提出日：2019年10月25日

1. プログラム名称 (和文) (英文)	多文化共生・統合人間学国際卓越大学院 World-Leading Innovative Graduate Study Programme in Integrated Human Sciences for Cultural Diversity (WINGS-IHS)
2. プログラム責任者	氏名：太田邦史 職名：総合文化研究科 研究科長
3. プログラムコーディネーター	氏名：高橋英海 職名：総合文化研究科 教授
4. 実施組織・学内外連携	
代表研究科(教育部)・専攻等	総合文化研究科
学内他研究科(専攻等) ・附置研究所等	情報学環(学際情報学府)、東洋文化研究所
学外他機関、企業等	シンガポール国立大学、ベルリン自由大学、ゲッティンゲン大学、清華大学、成均館大学、延世大学、カザフ国立アルファラビ大学、カタール大学株式会社 KIBI、総合地球環境学研究所(RIHN)、NPO法人 グローカル・アカデミー、NPO法人 古瀬の会、社会福祉法人 浦河べてるの家、公益財団法人 トヨタ財団
5. 学生受入開始時期	2020年4月
6. 養成する人材像【100字程度(±20%)】	
持続可能な開発目標(SDGs)の達成のためには、文化の多元性を理解し、共生を可能とする人材の育成が急務である。そこで、「統合人間学」という文理統合的な教養を修得し、多文化共生の理念を実現し未来社会を協創できる高度専門人材・実務家を養成する。	
7. プログラムの特色等【400字以内】	
SDGsの実現に必要な「多文化共生」には、民族や国境などに起因する文化間の共生だけではなく、世代差やジェンダー、宗教、障がいの有無など、多面的な社会的障壁を超越する共生が含まれる(多元的共生)。多元的共生を社会実装する次世代人材を育成するためには、単なる専門的知識の蓄積だけではなく、文理を超えた幅広い学知を学び、現場において実践的な研修を行うことが必要である。本プログラムではこのようにして培われる統合的教養を「統合人間学」と定義し、文理の垣根を越えた授業・現地実習による実践的な教育を行い、下記の能力を持つ統合人間学を修得した博士号を有する高度専門人材や実務家の育成を目指す。本プログラムを主専攻・副専攻とする学生双方を受け入れる。	
①多文化共生を実現するための問題発見・解決能力 ②多文化共生の社会への実装を可能とする構想力・リーダーシップ ③産官学民の様々なステークホルダーと協働するための調整能力	
8. 研究科(教育部)内での本申請に係る承認	総合文化研究科教授会 年月日 承認 情報学環教授会 年月日 承認
9. 本件問合せ先(事務担当など)	多文化共生・統合人間学プログラム事務局 駒場Iキャンパス17号館1731室 電話：03-5454-6415 Email: info@ihs.c.u-tokyo.ac.jp

【ここまでで1ページ以内】

10. プログラムの概要・特色等【1ページ以内】

本プログラムは、博士課程教育リーディングプログラムとして2014年4月に設置された、総合文化研究科と情報学環（学際情報学府）を責任母体とする修博一貫の**文理融合型・実務家養成型**教育プログラムの発展形として位置づけられる。リーディングプログラムとしての経験を踏まえ、また、これまでに築いてきた外部機関等とのネットワークを活用しつつ、「**持続可能な開発目標(SDGs)**」達成のための**人材育成というより明確な目的を立てて、より高度な教育プログラムの構築を目指す**ものである。

前身のリーディングプログラムは、副専攻（サブメジャー）プログラムとして開始した後、総合文化研究科の内部で定員（1学年あたり修士12名・博士6名）が割り当てられ、2018年4月から主専攻プログラム（メジャープログラム）としても始動するに至った。**主専攻化したことにより、高度な学知を身に付けつつ実社会での活動を志向する学生の育成が可能となり、プログラムの性格がより明確化した。**リーディング大学院の主専攻生は総合文化研究科の文系4専攻（言語情報科学・超域文化科学・地域文化研究・国際社会科学）に所属を置く学生を受け入れ、副専攻生としては総合文化研究科の理系専攻（広域科学）と連携部局の情報学環（学際情報学府）などの他研究科からも若干名を受け入れてきた。本国際卓越大学院では、理系専攻にも主専攻生採用の道を拓く一方、総合文化研究科の文系・理系の全専攻から副専攻生を募り、入試成績などにより**厳選した学生を国際卓越大学院の奨励生とする。**

教育カリキュラムの特徴は2点ある。まず、人文学、社会科学、自然科学の統合的な理解を深めるための授業として、文社理に対応する3教育プロジェクトによる実験実習科目やリテラシー科目を実施する。さらに、教養教育高度化機構の関連部門をはじめとする学内のSDGs関連研究教育機関の協力の下、SGDsで謳われる普遍性、包摂性、参画型、統合性、透明性を実現するためのスキルを、授業、実習、インターンシップ、現地研修などを用いて、実践的な観点から学ぶ。

本プログラムの最大の強みは、リーディング大学院の期間中に培い、実績を積んできた教育手法、すなわち、**①学術研究と現場体験の連動、②異分野研究者との協働、③学生の主体的活動の促進**、を構築してきたことにある。①を実現する仕組みとしては、教育、福祉、地方創生等の多岐のテーマに関して、多様な**学外研修や学外インターンシップ**を行っている。これらの活動についてはこれまでに連携実績を積んできた学外機関との協業を継続していく。履修生は、学外研修とその事前・事後の学習を通して**座学と実践の両面から問題を理解する力を身につけると同時に、インターンシップを通して研究のみでは経験できない現場感覚を身につけていく。**②に関する仕組みとしては、プログラムに在籍する**理系・文系の多様な専門を持つ学生が授業や研修等の場で協働し、自分の専門の枠を超えた学際性をたえず磨いていく環境を醸成する**ほか、履修生が研修や講演会を通して**学外の社会人や組織と協働**することを促し、自らの在り方を相対的見地から社会の中に見いだせるように導く。また、国際メンター制度、海外の大学との共同セミナーやシンポジウム、外国語習得（英語以外にヨーロッパ系・アジア系各1言語）の義務化、短期留学の奨励等の国際性の育成に関わる仕組みを通して、履修生は**自らの研究・活動を国際的な舞台上で発信する力を養う。**③に関わる仕組みとしては、本プログラムに特有の制度でもある、学生の主体性と創意工夫にもとづく「**学生による自主企画**」がある。そこでは、履修生は分野の異なる学生と協働し、自分たちで研修等の活動を企画するなかで、地道な事務作業、書類作成、相手との交渉、全体の調整と統括等、主体的な実践のために必要な交渉力や調整能力、企画力などの多様な能力を身につけていく。

以上で略述したカリキュラムと教育手法からは以下の成果が期待される。

- 1) **「統合人間学」という高度な教養の獲得**：「統合人間学」とは、自らの専門性や独自の視点に軸を置きながら他の専門知・実践知を統合し、それを駆使していく実践的なレベルでの教養である。これを身につけることで、既成の学問領域がもはや通用せず、たえず変化する情勢のなかにおいても、他者と協働して課題解決の道を切り開くことができるようになる。
- 2) **多文化共生への理解の深化**：研修や自主企画、海外の大学生との交流を通して、いわゆる文化の差だけでなく、文系と理系、産業・行政・学術、健常者と障害者、都市と地方、ジェンダー、人間と自然等などの障壁を乗り越える「多文化共生」の意味を理解し、さらにそれを各自の専門や研究に活かして、研究のさらなる深化を目指すことができるようになる。
- 3) **多様な人的ネットワークの形成**：研修やセミナー等で協働したプログラム生の仲間、NPOやNGOなどの組織、企業や地方の行政機関やコミュニティ、国内外の他大学との間に、大学としてのみならず、学生たちにとっても将来継続的に関わり、協力していける共創型人的ネットワークを構築していく。

SDGsに集約される、世界が直面する喫緊の課題に取り組む人材として、本プログラムが育成を目指すのは単なる従来型のリーダーではない。高度な専門性と広い視座で異分野を統合し組織をまとめる**コーディネーター**であり、人々の活動を仲介する**メディエーター**であり、さらには活動を裏から支える**サポーター**でもある。今後産官学民の間で活躍する人材に求められるのは、自らに期待されることに応える使命感だけでなく、足りないことを学ぶ謙虚さに裏打ちされた**真の教養**である。本プログラムでこのような人格面での研鑽も目指す。

11. 入試・選抜方法	メジャープログラムとしては、書類選考ならびに面接審査によって入学試験を行い、学業成績、研究計画、過去の活動、語学能力等に基づいて、入学者のうち学業において優秀でありかつ「持続可能な開発目標」が標榜する多文化共生社会の構築に関する高い意識と行動力を有すると判断される者を選抜して国際卓越大学院の奨励生とする（4月入学のみ）。サブメジャープログラムとしては、総合文化研究科広域科学専攻ならびに学際情報学府学際情報学専攻に合格した学生を中心にプログラム生を募集し、書類選考ならびに面接審査によって学生選抜を行い、国際卓越大学院の奨励生とする（4月入学及び9月入学）。
12. 質保証の仕組み (QE/FE等)	<p>年次更新を判定する質保証QEを各年度末に行い、最終年度には修了判定(FE)を行う。</p> <p>QEにおいては、①学生自身が作成した「プログラム・カルテ」（自己目標設定と研究進捗状況を記した自主管理カルテ）に基づく目標の達成度、②コースワークによる単位取得状況、③英語以外の二言語習得状況、④学外インターンシップの実施状況等を総合的に評価し、学生が計画通り円滑に研究を遂行しているか、本プログラムが涵養を目指す三つの能力の向上に向けて着実な取り組みがなされたかを判定する。</p> <p>審査には、各プログラム生に対して教員3名（原則、人文・社会・自然科学分野から1名ずつ）が当たる。審査では、成績原簿と学生が年間を通じて作成した「プログラム・カルテ」を資料として、学生によるプレゼンテーションと質疑応答が30分行われる。評価は、優、良、可、不可の四段階で行い、不可の学生は次年度から奨励生の資格を失う。</p> <p>また、QEの判定に用いられる①のプログラム・カルテに対しては、プログラム担当教員および国際メンターズチームが、年度末の判定時以外にも随時確認を行い、学生がどの程度研究を円滑に進めているかを計りつつ、適切に助言を与える。</p> <p>加えて、主専攻生に対しては、修士課程では、第2年次に論文作成の①着手報告会および②中間報告会を、博士課程では、研究の進捗状況に応じて①リサーチコロキウムおよび②ファイナルコロキウムを実施し、研究と論文執筆の進捗を審査し、指導助言を行う。</p>

13. 教育プログラムの要素との対応

教育プログラムの要素	対応状況 (○△×で記入)
(1) 育成する人材像の明確化、当該人材像に照らした体系的な教育課程の編成	○
(2) 上記(1)を実現するために、分野の横断や、国内外の他機関や産業界、社会との多様な連携を組み入れた教育プログラム	○
(3) 優秀な学生の博士課程進学への促進	○
(4) 優秀な社会人の受入れ（博士号取得）の促進	○
(5) 外国人留学生を含む多様な学生の獲得に向けた入学者選抜の改善や受入れへの対応	○
(6) 修博一貫（又は学修博一貫）の枠組みの効果的活用	○
(7) 厳格な質保証の仕組み	○
「対応状況」欄に△又は×がある場合には、その理由や今後の構想等を記載してください。	

14. 教育課程・修了要件

授業科目名等	単位数	履修方法	備考
【共通基礎科目群】 (講義科目)			
多文化共生・統合人間学講義Ⅰ (多文化共生・統合人間学概論)	2	概論およびリテラシー科目を含め 8 単位を取得	リテラシー科目は自身の専門分野以外の目を履修する。
多文化共生・統合人間学講義Ⅱ (サイエンス・リテラシー)	2		
多文化共生・統合人間学講義Ⅲ (ヒューマニティーズ・リテラシー)	2		
多文化共生・統合人間学講義Ⅳ (ソーシャルサイエンス・リテラシー)	2		
多文化共生・統合人間学講義Ⅴ (Academic English I)	2		
多文化共生・統合人間学講義Ⅵ (Academic English II)	2		
多文化共生・統合人間学講義Ⅶ (Academic Japanese)	2		
多文化共生・統合人間学講義Ⅷ (その他の外国語)	2		
【共生ユニット群】 (演習科目)			
多文化共生・統合人間学演習Ⅰ (価値・感性)	2	共生ユニット群から最低 2 単位を取得	演習科目はプログラムを構成する 6 つのテーマユニットおよび 5 つの地域ユニットに対応する (付記事項参照)。
多文化共生・統合人間学演習Ⅱ (格差・人権)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅲ (移動・境界)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅳ (情報・メディア)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅴ (生命・環境)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅵ (科学技術・社会)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅶ (日本)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅷ (東アジア)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅸ (ヨーロッパ)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅹ (中東・アフリカ)	2		
多文化共生・統合人間学演習Ⅺ (アメリカ・太平洋)	2		
【共生のための実習科目群】 (実験実習科目)			
多文化共生・統合人間学実験実習Ⅰ (生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス)	2		教育プロジェクトにおいて実施する実習の他、産官学へのインターンも含む。
多文化共生・統合人間学実験実習Ⅱ (科学技術と共生社会)	2		
多文化共生・統合人間学実験実習Ⅲ (Producing Multicultural Communities)	2		
多文化共生・統合人間学実験実習Ⅳ (Action Research for SDGs)	2		
多文化共生・統合人間学実験実習Ⅴ (Creative Network to 'Leave No One Behind')	2		
特別研究科目			
多文化共生・統合人間学特別研究Ⅰ (1年次)	1	(修士) 2 単位 (博士) 3 単位	年度内の活動状況および統合人間学への理解度を確 認・評価し、単位を付与す る。
多文化共生・統合人間学特別研究Ⅱ (2年次)	1		
多文化共生・統合人間学特別研究Ⅲ (3年次)	1		
多文化共生・統合人間学特別研究Ⅳ (4年次)	1		
多文化共生・統合人間学特別研究Ⅴ (5年次)	1		
計		(修士) 14 単位 (博士) 9 単位	
(その他付記事項)			
6 つのテーマユニット 価値・感性、格差・人権、移動・境界、情報・メディア、生命・環境、科学技術・社会 5 つの地域ユニット ヨーロッパ、日本、東アジア、中東・アフリカ、アメリカ・太平洋 教育プロジェクト 生命のポイエーシスと多文化共生のプラクシス、科学技術と共生社会、Producing Multicultural Communities: Methods, Designs and Praxes			

※適宜、行を増減、統合するなどして作成してください。

国際卓越大学院 多文化共生・統合人間学プログラム

養成する人物像

持続可能な開発目標 (SDGs) の達成のためには、文化の多元性を理解し、共生を可能とする人材の育成が急務である。そこで、「統合人間学」という文理統合的な教養を修得し、多文化共生の理念を実現し未来社会を協創できる高度専門人材・実務家を養成する。

育成する人材の3つの資質

- ①多文化共生を実現するための問題発見・解決能力
- ②多文化共生の社会への実装を可能とする構想力・リーダーシップ
- ③産官学民の様々なステークホルダーと協働するための調整能力

プログラムの概要・特色等

教育メソッドの特色

学術研究と現場体験

多彩な学外研修
学内・学外インターン

異分野との協働

多様な分野の学生間の協働
学外の個人・組織との連携
国際性の育成

学生の主体的活動

学生による自主企画

教育メソッドの成果

「統合人間学」の修得

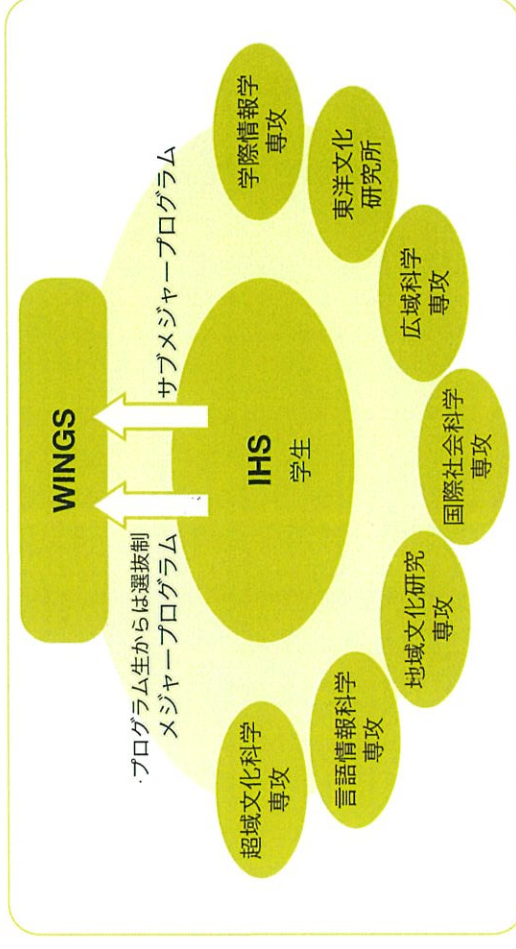
「多文化共生」の理解

ネットワークの形成

毎年度末の審査 (質保証の仕組み)

- ・コースワークによる単位取得状況
- ・英語以外の2言語の学習、短期留学、学内外インターンシップ
- ・多文化共生の理念的構築とその社会的実現に向けた取り組み

組織図



文理社にわたる3つの教育プロジェクト

プロジェクトH

人文学

プロジェクトN

自然科学

プロジェクトS

社会科学

地域ユニット、テーマユニット、持続可能な開発目標 (SDGs)

「地球上誰一人としてとり残さない」
多文化共生・統合人間学の実践

SDGs

普遍性、包摂性、参画型、統合性、透明性

価値・感性

情報・メディア

格差・人権

科学技術・社会

移動・境界

生命・環境

東アジア

中東・アフリカ

ヨーロッパ

日本

アメリカ・太平洋